

石井十次 vol.23 顕彰会だより



公益財団法人 石井十次顕彰会



公益財団法人 石井十次顕彰会

第23回を迎えた石井十次賞

岡山・南野育成園の叶原理事長に

昨春、高鍋町中央公民館ホールで贈呈式開催



第23回「石井十次賞」の贈呈式を昨年の4月11日、

高鍋町中央公民館ホールで開催しました。

受賞者には、大正3年、地域教育に貢献する目的で設立された教育施設を源流にもつ岡山市の社会福祉法人、南野（なんや）育成園の叶原土筆（かのはら・つくし）理事長（写真上）を選びました。

「石井十次賞」は、日本の児童福祉事業の先駆者である石井十次の精神と実践を継承し発展させることを目的として創設したものです。

毎年12月末を期限として都道府県や政令都市にある社会福祉協議会や社会福祉の有識者に推薦をお願いし、その候補者のなかから選考委員会が審査します。

叶原理事長の受賞理由は、昭和29年に社会福祉法人として認可されて以来、家庭的に恵まれない児童生徒を預かり、石井十次の理念である「家族主義」を受け継ぎながら自立を支援。2000人におよぶ卒園者を社会に送り出したことを高く評

価しました。

当日は河野俊嗣・宮崎県知事（出席は代理者）をはじめ、高鍋町の姉妹都市である山形県・米沢市の安部三郎市長ら、多数の来賓が見守るなか、厳かな雰囲気会場が包まれ、叶原理事長が「夢のようだ」と謝辞を述べると、来場者から盛んに拍手が送られていました。



贈呈式で祝辞を述べる米沢市の安部市長（右）。左は審査経過を報告する福島一雄選考委員長



叶原土筆理事長

かはら・つくし
1935年、東広島市生まれ。広島大学卒業後、岡山県に入職。県児童相談所などに勤務した。1996年から2013年まで南野育成園園長を務め、現在は同園理事長、および南野育成園ホーム長。11年、法務大臣表彰、13年に瑞宝単光章を授章。

66人の子どもたちと生活を共にしながら 愛の心を育む

南野育成園は大正3年の南野学園を出発点に昭和時代に入って私立南野家庭学院、大野村立南野育成園となり、昭和29年、社会福祉法人南野育成園として運営を開始。さまざまな理由で親元を離れざるを得なくなった児童生徒に、職員と共に生活するなかで基本的な生活習慣を身に付けさせ、社会性や協調性、人への思いやりといった愛の心を育むことを運営方針とされています。

また、叶原理事長は石井十次の生涯を描いた映画「石井のお父さんありがとう」の岡山ロケで多方面にわたって協力を惜しむことなく、映画完成に大きな貢献をされました。

現在は樋口俊司園長とともに28人の職員が地域の協力を得ながら66人の子どもたちをのびのびと育てられており、石井十次賞にふさわしい素晴らしい実績を重ねられています。

社会福祉法人 南野育成園
岡山市北区北長瀬表町2-14-25
☎086(241)8018

石井十次賞

社会福祉法人 南野育成園
理事長 叶原 土筆 様

孤児救済を自らの天職と定め、五十年の生涯を捧げた児童福祉事業の先駆者石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し愛の思いやりの心を全国に広めるため石井十次賞を制定しました

貴南野育成園は戦後、養護施設大野村立南野育成園として認定を受け昭和二十九年四月に社会福祉法人南野育成園となりました。南野育成園では家庭的に恵まれない児童生徒を預かり、職員と共に家庭生活と変わらない雰囲気をつくり個性を大切に養育し、家庭復帰や自立を支援することに重きをおいてこられました

このことは正に石井十次の理念に沿った偉業であり心から敬意を表しここに第二十三回石井十次賞を贈りその功績を讃えます

平成二十六年四月十一日

公益財団法人 石井十次顕彰会
理事長 黒木 敏之

▶表彰状全文



写真上は南野育成園の外観。写真左は園で開かれたクリスマス会などのイベント

小学生や中・高校生が石井十次への思いを発表

第32回石井十次生誕記念式典を開催

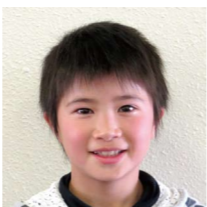


「石井十次賞」贈呈式に続き、高鍋町中央公民館ホールで「第32回石井十次生誕記念式典」を開催しました。式典では、町内の小中高生5人が石井十次から学んだことなどを作文にまとめて発表。そのうち2人は英語スピーチで石井十次への思いを表現しました。

高鍋西小学校5年の野中ほなみさんは、自分もできる「思いやり」があると思うので実行していきたくと発表。高鍋東中学2年の西吉董さんは、自分の意思をしっかり持ち、信念をもって最後までやり遂げる大切さを知ったと述べました。農業を通じて体だけではなく心もつくり、夢に向かって努力するとは高鍋農業高校2年の川口真希さん。一方、英語スピーチでは高鍋東中学3年の長町美咲さんが「信・愛・和」をいつも心にとめたいと発表。高鍋西中学校3年の榎木優衣さんは十次の青年期のエピソードを紹介し、思いやりの精神をいつまでも忘れないと述べました。



石井十次先生から学んだこと 高鍋西小学校 5年 野中ほなみ



わたしたち高鍋西小学校では、一年生から六年生すべての学年で、石井十次先生の一生について学習しています。道徳の時間に、「なわの帯」や「じゅん礼の子」などの十次先生にちなんだ出来事について学習します。

四年生では、「医書を焼く」について学習しました。十次先生は、子どものころからの夢であった医者になるか、こ児を救う道に生きるか大変なやんだそうです。でも、十次先生は、「医者になる者はたくさんいる。しかし、こ児を救う者はあまりいない。」と思い、こ児を救う決心をしました。わたしは、お父さんやお母さんがいない、まったく知らない子どもたちのために、子どものころからの自分の夢をあきらめることができる十次先生の広い心に感じました。

十一月には、「十次先生をしのぶ会」を行いました。一年生のころから学習してきた内容

に合わせて、はい句を作りました。わたしは「十

次先生 三千人の 父となる」とよみました。一日の食べ物のことを考えると、三千人分ではすぐお金がかかります。それなのに、あきらめずにたくさんのお児を育て続けた十次先生はともしんぼう強い人だなあと思いました。

わたしには十次先生のような大きな思いやりはできないかもしれないけれど、友達が困っていたら助けてあげるなど、わたしにもできる「思いやり」があると思うので、それができるようになりたいです。

十次先生の教え、「信・愛・和」を心に、ふだんの生活の中でも、たくさんの人に思いやりがもてるように心がけていきたいです。

「石井十次先生から生き方を学ぶ」

高鍋東中学校 2年 西吉 董



石井十次先生は一生を孤児救済に捧げた人です。「児童福祉の父」として知られています。

私は、石井十次先生のことには「岡山と高鍋に孤児院を作った人」だということは知っていましたが、長野県や東北地方の孤児救済もしていたことは知りませんでした。このことは、昨年のふるさと講話のときに、講師でいらつしやった税田格十先生

の話によって知り、いっそう感慨を深めました。それまで勉強してきた医学の道をきつぱりと捨てていることにも驚きました。ずっと自分が大切にしてきたことを捨てるというのはゼロからのスタートになるわけなのでとても勇気がいるものです。強い信念の持ち主だと思いました。ふるさと講話を聞きながら、石井十次先生の生き方にふれることも出来ました。

意見発表

(前ページより続く)

例えば、理想が高く、自分の意志をしっかりともち、そして臨機応変に自分の理想に最も近い行動を考え実行できる人だということですね。

この講話を機に、これまでの私自身を振り返ってみました。私は人に流されることが多く、自分で決めたことでも周りの人の意見を聞いて揺らいだり、途中でやめたりすることがあります。自分の決めたことは信念をもって最後までやり通す石井十次先生の姿勢は、これからの生き方のお手本になると思いました。これから先、自分の決めたことはやり通すことはもちろんですが、周りにも気をつかうことのできる、そんな大人になりたいです。

も頭を下げて、お礼をいつてくださいました。私は、このおばあさんの「ありがとう」がきっかけで、席を譲れるようになりました。時には、断られることもあります。その時はとても恥ずかしい気持ちになります。声をかけた方のほとんどが「ありがとうね」と言ってくさいます。その笑顔の言葉の優しさで私自身が幸せな気持ちになれるのです。

しかし、今の日本は多くの社会問題を抱えており、子どもを取り巻く環境も複雑化して、こんな知らない人同士のふれあいは少なくなっています。それどころか、児童虐待や不登校、自殺などのニュースが毎日のように流れ、家族や友人といった人間関係も希薄になっている気がします。これらを解決するためには、十次先生が行った「密室教室」のように真剣に子どもに向き合う努力が大切だと思います。私も寮生活を通して「人と向き合って話す」との大切さを知りました。相手と向き合うこ

十次先生から学んだ実行する勇氣

高鍋農業高等学校 農業科 2年 川口真希



私は、中学まで国富町で過ごし、高校入学を機に高鍋町で生活をするようになりました。この町へ来てから、石井十次先生のお名前を度々耳にするようになりました。

十次先生はどんな方だったのか、なぜ周りの人が口々に先生の話をするのか。私は興味を持ち、すぐに図書館で本を借りたり、先生に関する新聞記事を読んだりして、その功績を調べました。そして初めて、先生の素晴らしさを理解することができました。

十次先生は、社会福祉という言葉すらなかった時代に孤児院を開き、三千人以上の子どもを救済しました。これをやり遂げるには理想や信念だけではなく、実行する力が必要だったと思います。そして、十次先生の実行力があつたからこそ多くの理解者の協力が得られたのだと思います。

言葉で「人の役に立ちたい。人のためになることをしたい。」というのとはとても簡単なことです。思ったことを実行に移すことが難しいのです。私もやりたいことはいろいろあるのですが、勇氣がなくなかなか実行に移すことができません。

ある日、いつものように私はバスの前の方の席で、ぼんやりバス停を見ていました。バスが止まり、一人のおばあさんが乗ってこられました。杖をついていて、一目で足が悪いのだとわかりました。小さなおばあさんは席が空いていなかったため、揺れるバスにふらつきながら前に前にと歩いて来られました。不安定な杖の音が近づいてきます。座れる所を探すおばあさんの顔を見た時、何かがふり切れたように「どうぞ、座ってください」と立ち上がることができました。おばあさんは何回

とで、お互いに分かり合い、信頼することができます。そうすれば困った時には助け合い、ぶつかったり譲り合うことができるのです。

私が今学んでいる高鍋農業高校は、十次先生も学んだ明倫堂の跡地にあります。「人倫を明らかにする」という明倫堂の教えは、今でも大切にされ、その精神は私の生活する「明倫寮」にも受け継がれています。私は明倫寮で過ごす中で、何か私に出来ることで人の役に立ちたいと考えるようになりました。将来は管理栄養士になり、「幸せな社会作り」に食生活面から貢献したいと思っています。食べるということは生きるということであり、体だけでなく心も作ることでと農業を通じて感じるようになったからです。多くの孤児を救った石井十次先生の精神を忘れず、夢に向かって一歩ずつ努力していきたいと思っています。

意見発表

意見発表 (英語スピーチ)

The life of Ishii Juji

Takanabe Nishi J.H.S.
Enoki Yui

Ishii Juji was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be a naval officer. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha, but a year later, he fell ill and was not able to fulfill his dream.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town, he established a school called Babano-haru-asaban school where young villagers could study. During the day, they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected all villagers.

One day Juji found a boy and girl dressed in shabby Kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, “We are living our lives as beggars with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can’t keep on living this way. I implore you to make care of this boy.” Juji went home. His heart was full of sympathy. “Shinako, my dear, can’t we do something for them?” Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, “Just one boy would not be too much trouble!” They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later, he set up “The Orphan Education Association.”

I’m proud of Ishii Juji, because he is an outstanding person who came from my town. He is one of the great men who contributed to the progress of the Japanese welfare system. Juji’s statue continues to look down warmly on us. The people of Takanabe will never forget his spirit.

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は志を高く持った少年で、海軍士官になりたいと考え、攻玉舎という学校に入りました。しかし1年後、彼は重い病気にかかり、夢を果たすことができませんでした。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学びました。夏休みになると必ずふるさと高鍋に戻りました。そして村の若者たちのために「馬場原朝晩学校」という学校を創立しました。昼間は田畑に出て働き、夜はみんなで勉強をするのです。十次は村の人に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺にぼろをまとった男の子と女の子を見付けました。二人はおどおどとして不安そうな目で十次を見上げました。十次がおにぎりを差し出すと、二人は奪い取るようにして、あっという間におにぎりを平らげました。その夜、寺に二人の母親もいました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物乞いをして生きています。どこへ行っても人から石を投げ付けられて追い払われてしまいます。このままでは生きていけません。どうか、男の子だけでもあずかってください。」十次は胸いっぱい哀れみの情を満たして家に帰りました。「品子、私たちに何かできないだろうか。」十次は妻品子に相談しました。品子は哀れんでこう答えました。「男の子だけならなんとかなりますよ。」二人はその定一という男の子を引き取り、育てることにしました。人々がこのことを聞いて、たくさん子どもたちが十次に預けられたのでした。そして、のちに十次は「孤児教育会」を設立したのです。

私は、十次を誇りに思います。同じ高鍋町の人として、そして、日本で福祉の道を開いた一人の偉人として。十次の銅像は、これからもずっと私達を見守ってくれるでしょう。高鍋の人々は十次の精神をいつまでも忘れないでしょう。

高鍋西中学校
3年
榎木優衣



The Great Person~Ishii Juji

Takanabe-Higashi J.H.S
3rd Greade. Nagamachi Misaki

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a fine belt for the harvest festival. “Now you look handsome! Why don’t you go outside and play?” said his mother. Juji ran over to the shrine, his heart beating with joy. A small boy was sobbing near the gate of the shrine “What’s wrong, Matsukichi?” Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt, that he was being snubbed by his friends. “Stop crying, Matsukichi, I’ll give you my belt,” said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends, to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile, and said. “Is that right? Good for you. Matsukichi must have been happy.” His mother’s response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is the well know story about Ishii Juji. As you know, hi is one of the greatest people from Takanabe. I have often been taught Mr. Ishii’s teachings since my childhood. Now I respect him and I’m very proud of him.

There are words Mr.Ishii left: 信- To believe in each other, 愛- To love each other, 和- To live together in harmony’. I always keep them in mind, and I try to do my best to be useful person for society.

石井十次が小学校に入学するころ、十次は秋祭りに素敵な帯に新調した着物を母に着せられていました。「さあ、これできれいになったわ。外で遊んでらっしゃい」と母が言いました。十次は胸をはずませて天神さまに行きました。すると、一人の男の子が鳥居の近くで泣きじゃくっていました。「どうしたんだい？ 松吉。」十次が尋ねました。しかし、十次は松吉が縄の帯にみすぼらしい着物を着ているので、みんなにのけものにされていることがわかりました。「泣くんじゃないよ、松吉。ぼくの帯をあげるから。」十次は自分と松吉の帯を取り替えました。その後、松吉を連れて行ってみんなと遊びました。

夕方、家に帰ると十次は母に彼のしている帯について尋ねられました。十次はおそるおそる正直にわけを話しました。母は優しく微笑みかけながら「そうなの？ それは良かったわ。松吉は喜んだに違いないわね。」と言いました。十次の母のことは彼が奉仕の仕事につくきっかけになりました。

これは石井十次のよく知られている話です。ご存じの通り、彼は高鍋町出身の偉大なる先人たちの一人です。私は石井十次の教えについて子供の頃から教えられてきました。そのおかげで私は石井十次を尊敬し誇りに思っています。

石井先生の残した言葉があります。信—お互いを信じること。愛—お互いを愛すること。和—協調しながら共に生きること。このことばを私はいつも心にとめ、社会に役立つ人間になろうと努力しています。

高鍋東中学校
3年
長町美咲



没後100年、偉業への思い新たに

第24回を数える「石井十次顕彰のつどい」を、河野俊嗣・宮崎県知事、佐藤勇夫・県社会福祉協議会会長、小澤浩一・高鍋町町長を来賓に迎え、平成26年11月9日、高鍋町中央公民館ホールで行いました。

「石井十次をたたえる歌」で幕を開けた舞台では高鍋西小学校児童が合唱や合奏を披露したほか、クイズ形式で石井十次の功績の数々を紹介しました。

また、児童劇では、明治時代に岡山で起こっ

た大洪水時の岡山孤児院の活躍ぶりを熱演。院が食料不足に陥っていたにもかかわらず、地域の救助活動に力を注いだという史実を伝え、人を思いやる心の大切さを訴えました。

最後に元高鍋東小学校校長の大川周士先生が「石井十次を育んだ高鍋の気風」と題して講演。高鍋藩の藩政時代から明治時代にかけて、高鍋が人間愛に満ちた偉人たちをいかに輩出してきたかを紹介するなかで石井十次を振り返り、あらためてその偉業をたたえました。



祝辞を述べる小澤町長



記念講演を行った大川先生



児童劇や発表、合唱・合奏で大活躍してくれた高鍋西小学校のみなさん



ご報告

このたび、みなさま方より多額のご寄付をいただきました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を記させていただきます。

篤志寄付

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 宮崎市 株式会社印刷センタークロダ様 | 高鍋町 相馬久美様 |
| 高鍋町 永友吉人様 | 高鍋町 株式会社増田工務店様 |
| 宮崎市 永野雄造様 | 高鍋町 SSグループ様 |
| 高鍋町 有限会社事務機のフクモト様 | 高鍋町 宇田津士郎様 |
| 宮崎市 アクティブ情報システム株式会社様 | 高鍋町 株式会社高鍋衛生公社様 |
| 宮崎市 ライジングケア株式会社様 | 高鍋町 株式会社黒木本店様 |
| 高鍋町 杉原昭憲様 | |
| 宮崎市 宮崎日日新聞社様 | |

忌明寄付

- | | |
|------------|------------|
| 高鍋町 青木眞智子様 | 木城町 児嶋草次郎様 |
| 高鍋町 松村美由紀様 | 宮崎市 大山俊郎様 |

編集後記

「顕彰会だより」第23号をお届けいたします。昨夏は例年になく雨が多く、これまでになく気象が続きました。みなさまお変わりなくお過ごしでしょうか。さて、今期から当会の理事長を黒木敏之氏にお願いいたしました。また、これを機に「顕彰会だより」も誌面を一新させていただきました。より読みやすくなったと自負しておりますが、いかがでしょうか。みなさまの忌憚のないご意見をお聴かせいただければ幸いに存じます。今後とも当会、ならびに本誌をよろしく願っています。最後になりましたが、みなさま方ますますのご健勝をお祈り申し上げます。

公益財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
 児湯郡高鍋町大字上江8-1-3番地
 ☎0983-12314312